Journal of Bunkyo Women's University
Vol.2, No.1, pp.141～163, 2000

「直説法反事実条件文」について

川　　﨑　　清*

Abstract

In this paper I consider three earlier treatments of what we call 'indicative counterfactual conditionals' in the light of grammar, semantics and pragmatics. One of the typical examples of indicative counterfactual conditionals is 'If you're the Pope, I'm the Empress of China.' In previous scholarly analyses, every scholar has agreed that the antecedent 'If you're the Pope' is attributed to the addressee, but no scholar has made a clear statement about the attribution of the consequent 'I'm the Empress of China'. In fact, there seems to have been a tacit understanding that the consequent should be attributed to the speaker, because it should be thought of as the conclusion drawn from the antecedent by the speaker. Contrary to this popular belief, I argue that the consequent should also be attributed to the addressee. I show how my new theory makes it possible to explain where the ironical meaning of indicative counterfactual conditionals comes from.

Key Words: indicative counterfactual conditional, antecedent, consequent, definitional statement, tautology, interpretive resemblance, contextual implication, verbal irony

---

On Indicative Counterfactual Conditionals

＊Kiyoshi Kawasaki
Correspondence Address: Faculty of Business Administration, Bunkyo Women's University, 1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-gun, Saitama 356-8533, Japan.

Accepted October 11, 2000.　　Published December 20, 2000.

【０】論点

本稿では‘If you're the Pope, I'm the Empress of China.’ ‘If he is a professor, I am a Napoleon.’といった条件文を私たちが聞いた（読んだ）とき，どのような推論を行って，前件（antecedent）ｐと後件（consequent）ｑの関係を理解し，この条件文全体の意味を了解しているのかを検討する。

本稿で論じる条件文は直説法反事実条件文（indicative counterfactual conditionals）と分類される。従来の研究では，この条件文の前件命題ｐ（you're the Pope）は聞き手に帰属する（つまり，聞き手の発言内容である）ことが指摘されていたが，後件命題ｑ（I'm the Empress of China）については話者に帰属するのか聞き手に帰属するのか，あるいは世間一般の人に帰属するのかが明示的に論じられたことはなかった。そして，この表現を単にクリシェーとして扱い，意味解釈の道筋の来歴を問うことを放棄するか，あるいは，暗暗裏に，後件命題ｑは話者に帰属する，としてきたのが従来の研究の到達点であったとしてよいだろう。前者の立場は，この表現の意味作用発生のメカニズムを文献的に跡付けることは今のところ憶測の域を出ないものになる，という慎重な姿勢の現れであるかもしれない。後者の立場は，後件命題ｑは話者が前件命題ｐから何らかの推論を経て引き出した結論だと考えるゆえのものであろう。

それに対し本稿の論者は，そもそもこの条件文においては，前件命題ｐは勿論，後件命題ｑも聞き手に帰属すると考えるべきだと主張する。その扱い方の方が，直説法反事実条件文が持つ，話者の聞き手に対する皮肉の意味合いの由来や，他の条件文との相違を明示的に指摘できるからである。

【１】先行研究

ここで先行研究として言及するものは，本稿で扱う直説法反事実条件文（indicative counterfactual conditionals）ばかりでなく，多様な条件文の意味解釈を論じた射程の長い研究である。本稿では，それらの研究が扱っている問題のうち，本稿の論点に係わる部分のみの要約を以下に示すことにする。

条件文を論じた論文は多いが，直説法反事実条件文を最も詳細に論じ，それゆえに最も多く引用される代表論文は Akatsuka（1986）であろう。以下は Akatsuka（1986）の説の要約である。

Akatsukaによれば，従来の条件文の研究の多くは，自然言語の条件文を導くifを形式論理学における論理用語（logical connectives）の「⊃」，すなわち実質含意（material implication）と同様の意味を持つ語として扱い，ifによって結合される命題p，qの真理値（truth value）を決定して，条件文全体の意味の適否（論理的判断の適否）を真理表（truth table）[(1)]に照らして確認し，論じてきた。

形式論理学では，真理表の実質含意の第4行目は，前件命題pが偽であるならば後件命題qも偽であり，条件文全体の意味は真と分析される。命題p，qの間には想定すべき意味的関係が全く無くても，推論の進め方そのものは正しいとされる。

直説法反事実条件文'If you're the Pope, I'm the Empress of China.'は，このような形式論理学の分析の正当性を示すのに都合のよいものとして取り上げられてきた。この文は，真理表の実質含意の第4行目が示す通り，前件命題p（you're the Pope）が偽であるならば，後件命題q（I'm the Empress of China）も偽であり，条件文全体の意味（論理的判断の適否）は真とされる，すなわち文として適格であると分析されるからである。確かに一見したところでは，前件命題pと後件命題qの間に，何らの関係も見出せないにもかかわらず，文全体の意味は了解できるからである。

しかしながら，自然言語の話者は直観的にこの分析に不満を感じざるを得ない。自然言語の条件文には前件命題pと後件命題qの間に必ず何らかの関係（connection）があると感じているからだ。しかし，この関係の特質を特定する論理学からの試みは，多くの場合不満足なものに終わった。

しかし，Akatsukaは，その条件文が使用される「先行文脈」や，条件文の「話者の命題に対する態度」などに十分な注意を払って分析すれば，直説法反事実条件文の前件命題pと後件命題qの間にも関係は見出せるとする。

Akatsukaは*Chicago Sun Times*に1979年7月に報じられた実話として，（1）の例文を挙げ，以下の説を述べている。

（1） a. Pope to a telephone operator in a small Swiss village: I'm the Pope.
b. Operator: If you're the Pope, I'm the Empress of China.

すなわち，直説法反事実条件文（1b）は必ず先行文脈を必要とし，前件に先行文脈の内容（you're the Pope）が命題として置かれ，それに対してあからさまに理不尽な内容（I'm the Empress of China）の命題が後件に置かれるという形をとる。上記の法王と交換手とのやりとりの意味解釈の仕方を定式化すると（2）のようになる。

（2） Pope: p
Operator: If p, as you say, q

上の式で分かるように，Akatsukaは，前件命題ｐは先行する聞き手の発言の引用（quotation）であり，後件命題ｑは聞き手とのやりとりの中で新たに獲得された情報（すなわち前件命題ｐ）に対する話者の反応であるとする。Akatsukaは直説法反事実条件文の前件命題ｐと後件命題ｑの間にある関係は，話者の命題内容に対する評価的態度に係わるもの，であるとする。そして直説法反事実条件文を発話する話者の意図は，すぐ前の聞き手の発言内容（I'm the Pope）を馬鹿馬鹿しいと思い，それに対する反応として，あからさまに理不尽な内容（I'm the Empress of China）の命題を対置してみせて，その発言は実に馬鹿げた内容だと話者が考えていることを聞き手に強調して伝えることにある，とする。上の交換手は（If you're the Pope, I'm the Empress of China）を発話することで（３）の意味を伝えた，とするのである。

（３）…the telephone operator is asserting, 'Your claim is just as absurd as saying that I am the Empress of China!' （Akatsuka 1986: 335）

次にSmith（1983）が挙げられる。Smithは（４）の例文を挙げて，それらの後件命題ｑの表現は一種のクリシェー（cliché）であるという。

（４） a. If John knows the answer I'm a Dutchman.
b. If you're a policeman I'm the king of China.
c. If that car can do 40 to the gallon I can fly to the moon.

Smithは更にこれらの文が発話されるときは，不信を表す特別の音調（a special disbelief intonation）で発話され，それが他の条件文とこれらの文とを区別する，としている。

Smithは上記（４）の意味解釈は，まず後件命題ｑの偽が意識され，次に条件文全体の意味が真であるならば，真理表の第４行目に従って，前件命題ｐは必然的に偽になると判断される，とする。人は必ずしも論理学の真理表について知っている訳ではないが，上記のような推論は可能だとしている。[2] （Smith 1983: 5）

次はEun-Ju Noh（1996）であるが，彼女はAkatsuka（1986）を引用して，分析の際に命題内容に対する話者の態度を考慮すべきだというAkatsukaの主張に同意している。ただし，彼女自身の（1b）の解釈は（５）だと述べている。

（５） I think（95）［(1b)］means something like 'if you say 'I'm the Pope', I say 'I'm the Empress of China'. （Eun-Ju Noh 1996: 160）

以上をまとめると，Akatsuka（1986）の功績は，直説法反事実条件文は必ず先行文脈を必

要とすることを指摘したこと，また前件命題ｐと後件命題ｑの間にある関係は，話者の命題内容に対する評価的態度に係わるものであることを指摘したことである。Smith（1983）の貢献は，直説法反事実条件文はあからさまな不真実の内容（a blatant falsefood）を後件に含む表現で，不信を表す特別の音調で発話される一種のクリシェー（cliché）であることを示した点である。Eun-Ju Noh（1996）の貢献は，直説法反事実条件文 'If you're the Pope, I'm the Empress of China.'のあり得べき解釈の一つを明示的に示したことである。

【２】Akatsuka（1986）説，Smith（1983）説，Eun-Ju Noh（1996）説の問題点

Akatsuka（1986）は上記の法王と交換手とのやりとりの意味解釈の仕方を上記（２）のように定式化した。（６）として再掲する。

（６） Pope: p
Operator: If p, as you say, q

この式に問題の直説法反事実条件文を代入すると（７）になる。

（７） If you're the Pope, as you say, I'm the Empress of China.

（７）を見て分かることは，as you say という comment clause[(3)] の挿入で，If ｐのｐが聞き手の発言の引用であることが明示されている点である。すなわち Akatsuka はｐが聞き手に帰属すると主張しているのだ。しかし，ｑについては，それが誰に帰属すると考えるべきなのか（６）及び（７）は特に示しておらず，判然としない。それを知る唯一の手がかりは（７）の表す意味として Akatsuka が示したパラフレイズにあると思われる。それを（８）として再掲する。

（８）…the telephone operator is asserting, 'Your claim is just as absurd as saying that I am the Empress of China!'

（８）で分かることは，'If p, q'全体が引用符の中に収められて，①ｐが as you say の文脈的意味を体現して名詞句 Your　claim となっていること，②ｑは伝達動詞 say を動名詞にした saying の後にその目的語として収められていること，この saying もまた as you say が文脈的効力を発揮した結果出てきたと思われること，③話者である the telephone operator の p, q の命題内容に対する態度が just as absurd as と示されていること，そして最後に④として，こ

れら①②③が引用符の中に収められて，話者によって asserting されている，ということが分かる。これが Akatsuka の ‘If p, q’の意味解釈である。

このパラフレイズで問題にすべき点は，ｑを目的語とする動名詞 saying に意味上の主語が示されていない点である。従って，その主語としては，文脈から推測できるもの，例えば your 等が主語になっているので，それをわざわざ明示することなく省略したと解釈すべきものなのか，それとも，世間一般の人を主語として想定し，their saying とするところを，一般の人々が意味上の主語となるときは，通常それを省略するという規則に従って，省略したと解釈すべきものなのか，判断が分かれるところである。明らかなことは，Akatsuka は my saying とは考えなかったことである。すなわち，ｑの命題内容を話者である the telephone operator には帰属させなっかたのである。

論者は，Akatsuka は‘If p, q’のｐは勿論のことｑも聞き手に帰属することを何らかの形で示すべきであったと考える。その理由は節を改めて詳述する。

次は Smith（1983）の説であるが，彼は（４）に挙げた直説法反事実条件文の意味解釈においては，まず後件命題ｑの偽が意識され，次に条件文全体の意味が真であるならば，真理表の第４行目に従って，前件命題ｐは必然的に偽になると判断される，としている。Smith はパラフレイズを示していないが，彼の説を私なりのパラフレイズで示せば（9a）（＝4b）は（9b）のような段取りで解釈されることになる。

（９） a. If you're a policeman I'm the king of China (= (4b))
b. Since I'm obviously not the king of China, you're certainly not a policeman.

しかしながら，これは Smith が例として挙げた（４）を他の様々な条件文から切り離して，それだけを単にクリシェーと見て，それ以上の分析を放棄した場合に言えることであると思う。この解釈に立つと，聞き手の主張する前件命題ｐの内容と，話者の主張する後件命題ｑの内容とを，単に対立させているだけのことになる。そして，そのような解釈は，結局，次の Eun-Ju Noh（1996）の説と同じ弱点を持つことになると思う。この理由は節を改めて詳述することにする。

次は Eun-Ju Noh（1996）の説であるが，彼女は，法王と交換手とのやりとりでの交換手の発話（1b）は，上記に（５）として示したようにパラフレイズできるとする。それを（10）として再掲する。

（10） I think（95）［(1b)］means something like ‘if you say ‘I'm the Pope', I say ‘I'm the Empress of China'.

(10) を見て分かることは，Eun-Ju Noh は① 'If p, q'のｐの前に伝達動詞を含む you say を補充し，ｐをその目的語として収め，ｐが聞き手に帰属することを主張していること，②ｑについては，その前に伝達動詞を含むＩ say を補充し，ｑをその目的語として収め，ｑが話者に帰属することを主張していること，である。つまり，Eun-Ju Noh の解釈も結局は聞き手と話者の主張を対立させているだけのものとなる。

論者は，Eun-Ju Noh は 'If p, q'のｐは勿論のことｑも聞き手に帰属させるべきであったと考える。すなわち，ｐとｑの前に伝達動詞を含む you say を補充し，ｐとｑをその you say の目的語として収め，ｐとｑが共に聞き手に帰属する，とすべきであったと考える。これらの理由も節を改めて詳述することにする。

【３】'If you're the Pope, I'm the Empress of China.'の意味解釈の道筋 Part 1

本節では次の４点について論を展開する。

① 'If p, q'は定義文（definitional statement）を提示する言語装置であること，

②ｐ，ｑ間の意味関係は概略，P is roughly synonymous with q.となること，

③②の意味関係が成立するようｐ，ｑ間に意味的架橋をする言語的装置として，前方照応的用法（anaphoric）の代名詞がｑの主語に立つ必要があること，

④前件ｐと後件ｑの前に聞き手の発話行為を描写する you say を補充すべきこと，

次の文が Shakespeare の *Romeo and Juliet,* Act II, Scene iv にある。ジュリエットにロミオと会って，逢引の打ち合わせをしてくるように頼まれた乳母が，ロミオに言うせりふである。

(11)…if ye should lead her into a fool's paradise, as they say, it were a very gross kind of behaviour, as they say…

(Shakespeare, *Romeo and Juliet,* Act II, Scene iv)

（もしお嬢様を，俗に言う愚者の楽園に連れこむと申しますか，おだましになるようでしたら，それこそ俗に言うふらち千万ななされようですよ。）　（小田島雄志　訳）

この文で注目すべきは，前件命題ｐと後件命題ｑを意味的に架橋する言語的仕掛けが組み込まれている点である。それは後件命題ｑの最初の語である前方照応的（anaphoric）代名詞 it である。それによって前件命題ｐ（ye should lead her into a fool's paradise）が指示され，丸ごと命題ｑの中に主語として組み込まれる。そして，ｐを丸ごと受けたその it が were a very gross kind of behaviour という述語と結合され，ｑの命題文を完結させる。急いで注釈をしておくと，前件ｐの後の as they say は a fool's paradise という語句について，後件ｑの

後の as they say は a very gross kind of behaviour という語句について，それが世間で言われている言いまわしであると comment をしている。Akatsuka の場合の as you say のような命題内容全体の帰属を示す comment clause ではないことに注意されたい。

この文の it のような前件命題ｐと後件命題ｑを意味的に架橋する言語的仕掛けがあれば，ｐ，ｑ間の意味関係は把握しやすい。(11) の場合は，ｐ，ｑ間の意味関係は，「愚者の楽園に連れこむことはふらちな行為である」というもので，「ｐはｑである」と定義する関係になる。

以下では前件命題ｐと後件命題ｑを意味的に架橋する言語的仕掛けが it ではなく，he, she, you である場合を順に見ていくことにする。

次の（12）は Johnson 博士が言ったという有名な文である。

(12)　When a man is tired of London, he is tired of life.

(Boswell, *Life of Johnson*)

この文では前件が if 節でなく when 節であるが，when 節は背後に If at the time when という意味を持っており，一種の条件文と考えられる。そのように考えて a man is tired of London をｐ，he is tired of life をｑとすれば，ｐ，ｑ間の意味関係は，「ロンドンに飽きた人は人生に飽きた人である」というもので，「ｐはｑである」と定義する関係になることはすぐに理解できるであろう。この文の場合もｐ，ｑ間を意味的に架橋している言語的仕掛けは，ｑの最初の語である前方照応的代名詞の he である。ｐは he によってｑの中に丸ごと組み込まれ，is tired of life という述語と結合し，ｑの命題文を完結させる。以上の事情を示せば（13）のようになる。

(13)　He (＝the man) who is tired of London is tired of life.

前方照応的 he はｐの中の a man のみを指示して，ｑの中で the man の代理をするだけではなく，ｐ全体を文脈としてｑの中に組み込む機能を果たしている。

次の条件文（14）も（12）と同様に考えることができる。

(14)　If she tries to erase the imprint of age, she runs the risk of destroying, at the same time, the imprint of experience and character.

前件ｐ（she tries to erase the imprint of age）はｑの最初の語である前方照応的代名詞の she によってｑの中に丸ごと組み込まれ，runs the risk of destroying the imprint of experi-

ence and character という述語と結合し，ｑの命題文を完結させる。以上の事情を示せば（15）のようになろう。

（15） She who tries to erase the imprint of age runs the risk of destroying, at the same time, the imprint of experience and character.

ここで命題ｑの中に comma で区切られて挿入された at the same time という語句の果たす役割に注目したい。この条件文の筆者は，前件ｐの中の she と後件ｑの中の she が同一人であることは勿論，その人物が時間的に隔たった地点にいるのではないことを誤解の余地なく読者に理解させ，その上で，まさにその人物が tries to erase the imprint of age したときに，runs the risk of destroying the imprint of experience and character という行為を「同時に」していることになる，と指摘したいのである。同一人が同時に二つの別の動作をできる訳はないので，ｐの中に描かれた行為を行うことは結局ｑの中に描かれた行為を行うことになる，という解釈になるが，その解釈を保証するために，筆者はわざわざ at the same time をｑの中に挿入したのである。この条件文のｐ，ｑ間の意味関係は，「年齢の刻印を消そうとすることは経験と人格の刻印を台無しにする危険を犯すことになる」というもので，これも「ｐはｑである」と定義する関係になる。

この文でもう一点指摘したいことは時制解釈の問題である。主節の述語動詞（runs）の時制は単純現在形であるが，この現在形はｐの事態が実現したら，その瞬間にｑの事態も実現するという事情を表す瞬間的現在用法（instantaneous present）のものであろう。ただし，文全体の内容は時間の経過に従って変化する内容ではなく，一般的真理を述べている。従って，この単純現在時制を一般的真理を表す timeless なものと考えてもよいが，その場合でもｐとｑの意味関係を規定する瞬間的現在用法が下敷きになっている点は銘記すべきであろう。

次に（16）a, b として示す条件文は，主語が you のものである。

（16） a. If you kill one flea in March, you kill a hundred. （Proverb）
b. If you risk nothing, you risk everything.

これらの条件文の意味解釈の道筋も（12）（14）と同様に考えてよいであろう。すなわち（17）a, b になる。

（17） a. You who kill one flea in March kill a hundred.
b. You who risk nothing risk everything.

これらの文で指摘したいことは主語 you の文法的性格の変容についてである。これらの文の主節の主語 you は前件命題ｐの内容を丸ごと後件命題ｑの中に組み入れる言語的装置として使用されている。つまり前方照応的代名詞として使用されているのである。しかし，人称代名詞の I, you は直示語（deictic words）と呼ばれ，その都度その指示物を外界に照応して決定しなければならない外界照応的（exophoric）代名詞で，前方照応等の文脈内照応用法（endophoric）を持たないとされている。しかし，(16) を見れば，(17) のように解釈せざるを得ず，you の文法的性格が変容していると言わざるを得ない。これらの文の主語 you は総称用法（generic）のものであり，特定の聞き手を指示していない点を考慮しても，やはり上述の事情は変わらないと思われる。

さて，(14)（16）で見てきた条件文はいずれもｐ，ｑ間の意味関係が，「ｐはｑである」と定義する関係になるものであった。その関係を（18）に示す。

(18) a. If p, q.
b. P is roughly synonymous with q.

そして（18a）が（18b）のように解釈されるようにｐ，ｑ間に意味関係の架橋をする言語的装置は前方照応的用法の代名詞がｑの主語に立つことであった。そして，その主語が命題ｐを丸ごと指示する形で，ｐをｑの中に組み込み，ｑの命題文を完結させる，という形が必要であった。以上の点を踏まえて，論者の考える直説法反事実条件文 ‘If you're the Pope, I'm the Empress of China.’の意味解釈の道筋を示すことにする。まず（１）に示したこの条件文が発話される文脈を（19）として再掲する。

(19) a. Pope to a telephone operator in a small Swiss village: I'm the Pope.
b. Operator: If you're the Pope, I'm the Empress of China.

論者は，operator は（19b）で Pope の発話行為を間接引用する形で描写し，Pope の発話行為によってなされた発言内容を皮肉まじりに解釈して見せている，と考える。従って，(19) のやりとりの意味解釈の仕方を図式化すれば（20）となる。

(20) Pope: p
Operator: If you say p, you say q

この図式に実際の発話を代入したものを（21），その解釈を（22）として示す。

(21) If you say you're the Pope, you say I'm the Empress of China.

(22) a. You who say you're the Pope say I'm the Empress of China.
b. Your saying you're the Pope is roughly synonymous with your saying I'm the Empress of China.

前件ｐ（you're the Pope）はｑの最初の語である前方照応的代名詞に変容した you によってｑの中に丸ごと組み込まれ，say I'm the Empress of China という述語と結合し，ｑの命題文を完結させている。そして，この文の意味は「あなたが自分はローマ法王だと言うなら，そう言った瞬間に私が中国の女帝だと言うことになるのですよ」あるいは「あなたが自分はローマ法王だと言うことは，概略，あなたが私のことを中国の女帝だと言うことと同義なのですよ」というものである。言うまでもなかろうが，「そう言った瞬間に～と言ったことになる」という解釈は，主節の述語動詞の単純現在時制を瞬間的現在用法のものとする考えによっている。

この解釈の問題点は次の２点であろう。まず第一は，前件ｐと後件ｑの前に補充された聞き手の発話行為を描写する you say がなぜ通常は言われないのか，第二は，前件ｐ（you're the Pope）の内容はその帰属を聞き手である Pope であるとしてもよいが，後件ｑ（I'm the Empress of China）の内容はこの条件文の話者の創案になる文なので，その帰属を聞き手である Pope にするのは不自然である。もし Pope に帰属すると考えるのが正しいのなら，それはなぜか，ということであろう。この２点の疑問に対する解答を次節以降で順次展開する。

【４】'If you're the Pope, I'm the Empress of China.'の意味解釈の道筋 Part 2

本節では，次の４点について論を展開する。

① you say が通常言われないのはなぜかの説明，
② tautology が意味解釈において果たす役割について，
③ you say は隠れた tautology であること，
④前件ｐと後件ｑから省略された聞き手の発話行為を描写する二つの you say は，前者は外界照応的省略，後者は前方照応的省略と説明できること，

まず，前件ｐと後件ｑの前に補充された聞き手の発話行為を描写する you say がなぜ通常は言われないのか，を説明する。それは，定義提示構文としての'If p, q'では，主語，述語が，しばしば語彙，文構造において symmetric になるという知識が，you say を言語化する必要のないものとし，you say を欠いた形のままクリシェーとなった，というのが論者の解答であ

る。ただし，クリシェ一化したと言って，それ以上の説明を拒絶するのではなく，次に述べる過程を経てクリシェ一化した，という仮説を提示したい。この仮説を次の（23）（＝(16)）以降の例文で検討する。

(23) a. If you kill one flea in March, you kill a hundred. (Proverb)
b. If you risk nothing, you risk everything.

(23) を見てすぐ気が付くことは，前件ｐと後件ｑの一部が symmetric であるということである。別言すれば tautological（同語反復的）であるということである。実は，‘If p, q.’において，p, q が tautological であるという形式そのものが，聞き手に通常の意味解釈でなく，別の意味解釈をすべきであると促す合図になるのである。その点を次の（24）で確認しておく。

(24) a. If it happens, it happens.
b. It happens. There is nothing we can do about it. So prepare for the consequences.

(24a) は p, q が全くの tautological な，あるいは symmetric な場合であるが，聞き手はこれを聞いて，「もしそれは起こるなら，それは起こる」といった文字通りの解釈ではなく，(24b) のような意味であると再解釈を促されるのである。[(4)] なお，tautology については別稿で詳しく論ずるので，ここでは tautological な，あるいは symmetric な形式が聞き手に文字通りの意味解釈とは別の意味解釈をするように促す，という点のみを確認して論を先に進める。

さて，(23) に戻ると，この場合は，その文字通りでない読みとは，「ｐは，概略，ｑと同義である，ｐすることはｑすることと同じである」というものであった。つまり，聞き手は p, q の tautological な形式を聞いて，前件ｐは解釈を受けるべき内容，すなわち対象言語（object language）として提示され，後件ｑは前件ｐの解釈を記述するメタ言語（metalanguage）として提示されている，という事情を理解するように促されることになるのである。

ここで注意しなければならないことは，その人にメタ言語を操作しているという意識が全く無くても，人は日常的にメタ言語を操作している，という事実である。例えば次の（25a）には，隠れた tautology があり，その tautology が再解釈されて提示されたメタ言語での意味記述がその文の意味になっている。

(25) a. He has a temperature.
b. If every human being has a temperature, he has a temperature.
c. He has a fever.

(25a) は「彼は体温がある」というのが，文字通りの意味である。しかし，その解釈では，人間には皆体温があるのだから，単なる tautology で情報のない (uninformative) 文となってしまう。そこで，この tautology が (25b) のような文として再解釈されて，a temperature は a bodily temperature higher than the correct one つまり「平熱よりも高い体温」と解釈され，結果として (25a) は「彼は高熱を出している」の意味を表す文と解釈されるのである。[(5)] このとき，a temperature の再解釈された意味の「高熱」は，メタ言語で記述されたものなのである。ついでに記しておくと，(25c) のように「高熱」を直接指示する語で表せば，それはメタ言語による表現ではなくなる。

上で見たように，言語使用者にメタ言語を操作している意識が無くても，人はメタ言語を使う。そして，その表現が一種のクリシェーとして確立すると，その意味発生の仕組みである tautology の文は意識されなくなる。その理由は，もともと (25b) のような tautology の文は，実際に発話されることはなく，新しい意味解釈を生むために，その意味解釈を求める過程で意識の中に供給される仮説としての隠れた tautology だからである，と思われる。

直説法反事実条件文の'If p, q'にも，この隠れた tautology が存在していると考えられる。この文の話者は，後件 q が前件 p の解釈を記述するメタ言語として機能している事情を意識せずに，'If p, q.'構文を使用していると考えられる。(26) で確認しておく。

(26) a. If you're the Pope, I'm the Empress of China.
b. If you say you're the Pope, you say I'm the Empress of China.
c. Your saying you're the Pope is roughly synonymous with your saying I'm the Empress of China.

(26a) は既にクリシェーとして確立しているため，(26b) のような隠れた tautology の存在を通常は意識することなく理解される。そして，あらためてその意味について内省を重ねると (26b) を経て (26c) の意味構造を自覚するようになるのである。

ここまで説明してくると，後件 q (I'm the Empress of China) の内容は，この条件文の話者の創案になる文なのに，その帰属を聞き手である Pope とする理由も明らかであろう。後件 q は，前件 p の解釈として提示されたものなので，後件 q もその元をたどれば，やはり，Pope が言ったことになる，あるいは，「言ったと解釈される」ことになるのである。

次に，(26b) のような隠れた tautology の存在が，省略 (ellipsis) という文法現象からも正当化される経緯を見ておくことにする。

省略 (ellipsis) について Halliday & Hasan (1976) に次のような記述がある。

…ellipsis is a relation within the text, and in the great majority of instances the presupposed item is present in the preceding text. That is to say, ellipsis is normally an anaphoric relation. Occasionally the presupposition in an elliptical structure may be exophoric…If a housewife on seeing the milkman approach calls out *Two please!* she is using exophoric ellipsis; it is the context of situation that provides the information needed to interpret this. (Halliday & Hasan (1976): 146)

要点は以下のようになろう。

省略は通常前方照応的関係である。時折，省略された要素が外界照応的な場合もある。牛乳配達人が来たのを見て主婦が「２本ね」と言うとき，その主婦は外界照応的省略を使っているのである。解釈に必要な情報を供給するのは状況という文脈である。

Halliday & Hasan はこの主婦の発話の省略要素を補充してはいないが，論者が補充すれば次の（27）のようになろうか。

(27) ‘(Could I have) two (bottles of milk), please!’

さて，論者は（21）（26b）において，前件ｐと後件ｑの前に聞き手の発話行為を描写する you say を補充した。以下に（28）として再掲する。

(28) If you say you’re the Pope, you say I’m the Empress of China.

前件ｐの前の you say は，直前に Pope が発言したという事実の存在に依存して，外界照応的省略をして消去される。後件ｑの前の you say の省略については，事情はやや複雑であり，次のように考えられる。話者は，定義提示構文としての‘If p, q’を使うのであるから，定義提示構文としての‘If p, q’においては，p, q の主語，述語が，しばしば語彙，文構造において symmetric あるいは tautological になるという知識を心得ているはずである。その知識の反映で，前件ｐの前の you say は既に省略されて文の表面には現れていないのであるが，言わば残像として話者の意識に存在していると考えられる。それゆえ，その残像に対して前方照応すれば後件ｑの前の you say も，たとえそれが省略されても，復元可能であると判断されて，消去される。つまり，前件ｐの前の you say は外界照応的省略（exophoric ellipsis），後件ｑの前の you say は前方照応的省略（anaphoric ellipsis）と考えるわけである。‘If p, q’において通常は you say が言われない，すなわち省略されている理由を，省略（ellipsis）という文法現象から説明すると，このようになる。

【5】Akatsuka（1986）説，Eun-Ju Noh（1996）説の再批判

以上に説明してきた経緯を踏まえて，Akatsuka 説を（29）として再掲し，もう一度批判的に検討する。

(29) a. If you're the Pope, as you say, I'm the Empress of China.
b. …the telephone operator is asserting, 'Your claim is just as absurd as saying that I am the Empress of China!'

Akatsuka は（29a）に示したように as you say という comment clause を前件ｐの後ろに配し，（29b）の解釈が得られるとした。（29b）のパラフレイズを仔細に見ていくと，明言してはいないが，Akatsuka も，定義提示構文としての'If p, q'構文が持つ意味解釈の方向付け機能を利用していると思われる。

定義提示構文としての'If p, q'は，ｐとｑの意味関係を「ｐは，概略，ｑと同義である」（is roughly synonymous with）と理解せよ，という意味解釈の方向付けを行う。「～と同義である」は更に（is semantically equivalent to）とパラフレイズが可能である。Akatsuka のパラフレイズでも「ちょうど～と同じくらいである」（is just as absurd as）という同等比較が使われているが，これは更に（is equivalent, in the degree of absurdity, to）とパラフレイズが可能である。これを見ても分かるように，後者は前者の意義を部分的に借用していることは明らかであろう。また，ｐが Your claim と名詞化され，ｑは動名詞 saying の目的語として位置付けられているが，発話行為を表す名詞と動詞が殊更選ばれていることに注目したい。その理由は，Akatsuka に発話行為と発話行為の意味関係が問題であるという意識があった証明となろう。つまり，ｐとｑの命題内容を直接比較考量するのではなく，あくまでも，saying p と saying q との意味関係が問題となっていると，彼女は正当に考えていたと思われる。ただし，前にも述べたように Akatsuka はｑの真の話者が誰であるかについては何も語ってはいない。

以上をまとめると，Akatsuka 説に対する論者の不満は次の２点に集約できる。①定義提示構文としての'If p, q'のｐとｑの意味関係を利用しているのに，それに無自覚であること，②ｑの真の話者が誰であるかについては何も語っていない不徹底があること，の２点である。

次に Eun-Ju Noh の解釈を（30）として再掲し，今一度これまでの経緯を踏まえて補足説明をしておく。

(30) I think (95) [(1b)] means something like 'if you say 'I'm the Pope', I say 'I'm the Empress of China'.

勿論，Eun-Ju Noh のパラフレイズは文法的には問題の無い文である。しかし，このパラフレイズでは元の発話文が単に聞き手の主張と自分の主張を対比するだけの文，という解釈になってしまう。そのような解釈では，例えば，芝居での役を決めている場面での次の（31）の文と直説法反事実条件文の区別をつけることができないのである。

(31) A: I'm Romeo.
B: If you're Romeo, I'm Mercutio. (=If you say 'I'm Romeo', I say 'I'm Mercutio'.)

（31）では，前件ｐも後件ｑも真，もしくは近い将来に真になる内容であり，Ａ，Ｂ双方の主張が対比的に書かれているだけである。従って，この条件文では，前件ｐが解釈を受ける対象言語（object language）であり，後件ｑが前件ｐの解釈を記述するメタ言語（metalanguage）であるという事情はない。その点が本稿で論じている直説法反事実条件文と（31）とは全く異なるのである。

最後に，Akatsuka も Eun-Ju Noh も，前件ｐ（you're the Pope）は勿論，後件ｑも聞き手に対する皮肉（irony）になっている事情については，その経緯を全く説明していない。論者は，とりわけ後件ｑが意味的には聞き手に対する痛烈な皮肉として機能するというメカニズムの中に，後件ｑの帰属を聞き手であるとする根拠がある，と主張する。その根拠については，次節以降で説明する。

【６】ことばによる皮肉の意味の発生メカニズムについて

ここで，ことばによる皮肉（verbal irony）の意味は，どのようなメカニズムで発生するのかを Sperber & Wilson（1981，1992，1995）の説によって確認しておくことにする。

Sperber & Wilson は，皮肉の意味発生のメカニズムを説明するにあたり，まずことばの使用法に関して，使用用法（use）と言及用法（mention）の，二つの区別（use-mention distinction）をたてる。使用用法とは，事物や事態を記述するためにことばを使うときの，ことばの使用法のことである。言及用法とは，使用されたことば自体を更に説明し記述するためにことばを使うときの，ことばの使用法である。そして，皮肉の意味を担うことばは，言及用法で使用されたことばであると言う。更に，その皮肉の意味を担うことばは，話者が話者以外の誰かの発話を間接引用（indirect quotation）しながら，その引用自体の中にその発話内容に

対しての話者の態度（不承認，不信等）を織り交ぜて表現したものである，とする。

ここで重要な点は間接引用（indirect quotation）という点である。間接引用は二つの目的で使用される。一つは reporting（報告）と呼ばれ，元の発話についての情報を単に報告するもの，二つ目は echoing（態度表明的復唱と仮訳しておく）と呼ばれ，元の発話についての情報とそれに対する話者＝報告者の態度を同時に伝えるものである。この echoing が皮肉の意味の発生には重要な役割を果たす。なぜなら echoing は元の発話内容に対しての話者の態度（不承認，不信等）を織り交ぜた表現となるからであり，それが皮肉の意味の本質を成すからである。この皮肉の意味を担った発話を態度表明的復唱発話（echoic utterance）と呼ぶ。

ここで補足しておくと，直接引用（direct quotation）がなぜ問題にならないかというと，直接引用は元の発話で使用された文，語句を正確に再生すること（the exact words of the original are reproduced）が唯一の目的であり，元の発話内容に対する話者＝報告者の解釈や態度をその引用自体に交える余地が無いからである。

Sperber & Wilson は，更に，解釈的類似性（interpretive resemblance）という概念を導入する。解釈的類似性とは，二つの命題があるとき，その二つの命題が，論理的含意または文脈的含意を共有（a sharing of logical and contextual implications）していること，と定義されている。そして，この解釈的類似性という概念を使用して，元の発話と間接引用として echoing された態度表明的復唱発話（echoic utterance）との関係を次のように説明する。

ある少女が友人に次の（32）を語ったと想定しよう。

(32) a. I met an agent last night.
b. He can make me rich and famous.

（32b）は次の（33a）（33b）の二つの解釈が可能である。

(33) a. He can make me rich and famous, I believe.
b. He can make me rich and famous, he says.

（33a）は少女が独自の主張をしているという解釈である。（33b）は少女が報告か態度表明的復唱発話をしている，という解釈である。それゆえ，（33b）は少女の視点からエイジェントの元の発話を解釈した上で構成された文のはずで，その元の発話と（33b）には命題内容的類似性（resemblance in propositional content）がある，あるいは解釈的類似性（interpretive resemblance）がある，と考えるのである。

例えばエイジェントの元の発話が（34）と（35）であった場合の違いを考えてみよう。

(34) I can make you rich and famous.

(35)　I can do for you what Michael Caine's agent did for him.

エイジェントの元の発話が（34）であった場合は，（33b）は少女がエイジェントの発話を文字通りに解釈し，それを報告（または態度表明的復唱発話）として口にしたと考えられる。このとき（34）（33b）の表す二つの命題は，どの文脈においてもその全ての含意（implications）を共有している，といえる。なぜならば少女はエイジェントが発話した命題そのものに言及（mention）したことになるからである。「どの文脈においてもその全ての含意（implications）を共有している」という部分を敷衍すると，二つの命題の中にある He, I の人称代名詞の指示対象は同一人であり，you, me の人称代名詞の指示対象も同一人である。can, rich, famous という語彙も同義を表す。それゆえ，（33b）は，（33b）の話者の視点から元の命題（34）を再構成した命題であり，結局は同一命題を指示言及していることになる。結局は同一命題を指示言及しているのならば，どの文脈においても（34）と（33b）がその全ての含意（implications）を共有している，のは当然のことなのである。

エイジェントの元の発話が（35）であった場合は，（35）と（33b）の関係は次のようになる。マイケル・ケインのエイジェントが彼を裕福で有名にしたことが周知の事実であるという想定（assumption）が共有されている文脈においてならば，（35）は（33b）を文脈的に含意（contextually　imply）している，といえる。また，逆に（33b）は（35）と解釈的に類似（interpretively resemble）している，ということになる。

敷衍すれば次のようになろう。（35）も（33b）も「エイジェントはその雇用者である芸能人を裕福で有名にする」という一般的な想定から派生する下位命題の集合の成員である。従って，（35）が真であれば，（33b）も真であり，そして，（35）（33b）の表す二つの命題は，自らを派生した想定が同一なのであるから，当然のこととしていくつかの含意を共有している，ということになるのである。また，（33b）は報告者である少女の創案になる文であるが，その内容はエイジェントの元の発話を少女が自分の立場から解釈して構成したものなので，（35）に対して解釈的類似性を有するのである。

以上では，分析のための理論概念を説明するために，少女の発話が皮肉にはならない単純な例を見てきた。

皮肉の意味発生のメカニズムについては，Sperber & Wilson は，次の三つの条件が満たされた場合に皮肉の意味が発生するとしている。

①話者が他人の発話を間接引用すること，
②元の発話はその間接引用された発話を文脈的に含意する関係になること，また，引用された発話は元の発話と解釈的類似性を持つこと，この二つが聞き手に理解されること，
③話者がその発話から距離を置く態度（不信，不承認等）を同時に表出していることが聞き手に理解されること，

の三つである。

皮肉の意味発生のメカニズムそのものは，次節で，論者が直説法反事実条件文の最終的分析をする際に検討し，披露することにする。ここでは Sperber & Wilson が皮肉の意味の発生メカニズムを解明するために使用した理論上の概念（theoretic machinery）を紹介した。

（以上は Sperber & Wilson　1992に基づく要約）

【７】'If you're the Pope, I'm the Empress of China.'の意味解釈の道筋 Part 3

本節では，次の２点について論を展開する。

①話者が直説法反事実条件文を発話するに至るまでの推論プロセスの説明,

②後件ｑ（I'm the Empress of China）の内容が聞き手である Pope に帰属する理由の提示,

直説法反事実条件文の後件ｑ（I'm the Empress of China）の内容は，この条件文の話者の創案になる文であるにもかかわらず，その帰属を聞き手である Pope にするのはなぜか，という点の理由を皮肉の意味発生のメカニズムから説明する。問題のやりとりを（36）として再掲する。

(36)　a.　Pope to a telephone operator in a small Swiss village: I'm the Pope.
　　b.　Operator: If you're the Pope, I'm the Empress of China.

確かに聞き手（Pope）は後件ｑ（I'm the Empress of China）の内容を口にしていない。後件ｑの内容は明らかにこの条件文の話者（Operator）の創案である。そして，それは前件ｐ（you're the Pope）を言った聞き手に対する皮肉（irony）になっている。この事情は次のように（36b）の発話を分析することで解明できるであろう。

まずローマ法王と名乗る人物からの通話を受けた交換手は，概略，以下の（37）a～f のような推論の過程を経て，（36b）の発話を行ったと思われる。

(37)　a.　It cannot be the case that the Pope makes a phone call to someone in such a small village like this.
　　b.　The caller says he is the Pope.
　　c.　The caller must be telling a lie.
　　d.　According to his absurd scenario in which he is the Pope, no matter who you are, you can become someone famous like the Pope.
　　e.　Therefore, according to his absurd scenario, he must say I am the Empress of

China.　（he must say の must は epistemic modal で「～に違いない」の意）

f.　But, I dissociate myself from this conclusion and his absurd scenario.

つまり，I'm the Pope.ということばを聞いて，交換手は過去の経験や常識からローマ法王がこんな小さな村の誰かに直接電話をかけてくることはない，というシナリオを引き出し，それを前提として，ローマ法王と名乗る人物は嘘を言っている，と結論する。ここまでがａ～ｃである。更に，交換手は，この人物は，人は誰でもローマ法王のような著名人になれる，という想定（assumption）を持っているという情報を彼の発言から得る。その想定に従って，彼は自分をローマ法王と名乗ることができるのだ，と結論する。更に，その想定に従えば，彼は自分（交換手）を中国の女帝と言うに違いない，と結論を下す。そして，その結論や想定の全てから心理的に距離を置く態度を込めて，つまり皮肉の意味を込めて，この推論のプロセスを表すクリシェーとしての直説法反事実条件文 'If p, q'を使う。ここまでがｄ～ｆである。その結果，（36b）'If you're the Pope, I'm the Empress of China.'という文が産出されたのである。

（36b）で話者が行っていることは次の三つのことである。

①聞き手の先行発話の命題を不信，不承認の態度表明的復唱発話（echoic utterance）として前件ｐに推論の出発点となる前提として提示すること，これを論者は第一エコー（first echo）と呼ぶ。

②その前件ｐの命題（実は聞き手の先行発話を忠実に再現したもの）が暗に持つ論理的，文脈的含意を表す命題，それは常識で考えて明らかに偽であると聞き手に理解できる命題であるが，それを後件ｑに推論の帰結として提示すること，これを論者は第二エコー（second echo）と呼ぶ。

③①②を行うことで，聞き手の先行発話を可能とした聞き手自身の頭の中にある想定を，承認不可のものとして間接的に揶揄すること，

③を少し解説すると，I'm the Pope.ということばを聞いて，交換手は聞き手が「誰でも偉人になれる」という馬鹿馬鹿しい想定（assumption）を持っている，という情報を得る。その想定の下では，前件ｐ（you're the Pope）の内容は当然真となり，後件ｑ（I'm the Empress of China）の内容も当然ながら真となる。なぜならば，前件ｐも後件ｑもその想定から派生する下位命題の集合の成員だからである。従って，聞き手の元の発話（I'm the Pope.）と前件ｐ（you're the Pope）は共に後件ｑ（I'm the Empress of China）を文脈的に含意（contextually imply）していることになる。

同時に，後件ｑの内容は「ある人（この場合は私），が著名人（この場合は女帝）である」というものであるから，聞き手の元の発話と前件ｐの内容「聞き手がローマ法王である」の両方に解釈的に類似（interpretively resemble）していることになる。

ここで注目すべきことは，前件ｐ（you're the Pope）の内容は勿論，後件ｑ（I'm the Empress of China）の内容も聞き手のローマ法王と名乗る人物に帰属するとしなければ，皮肉の意味は発生しない点である。

なぜならば，ことばによる皮肉とは，本人にその発話を行わしめた，本人の持っているある想定を，そのような想定は間違っていると，次の２種類のことばの一方もしくは両方で暗に指摘し揶揄することだからである。その２種類のことばとは，①本人のことばを間接引用したことば，②もしくは本人のことばと解釈的類似性を持ち，且つ，そのことばに文脈的に含意される，別の（と言っても元をたどれば本人のことばと解釈できる）ことばである。前件ｐ（you're the Pope）は前者①のことばであり，それを論者は第一エコーと呼んだのである。そして，後件ｑ（I'm the Empress of China）は後者②のことばであり，それを論者は第二エコーと呼んだのである。後件ｑの命題内容ですら結局は自分（聞き手）の言ったこととなるからこそ，直説法反事実条件文の 'If p, q'を使用しての皮肉は，聞き手にとってこの上もない痛烈な皮肉となるのである。

以上で，論者は，直説法反事実条件文 'If p, q'においては，前件ｐも後件ｑも共に聞き手に帰属すると分析すべきである根拠を提示し得たと考える。

【８】まとめ

以上，論者は，①直説法反事実条件文の'If p, q'は，定義提示構文としての条件文の仲間であること，②そう解釈するためには前件ｐも後件ｑも共に聞き手に帰属すると解釈し，前件ｐと後件ｑの前に you say を補充した形で意味関係を考えるべきであること，また，③前件ｐも後件ｑも共に聞き手に帰属すると解釈した方が，他の条件文（例えば（31））との区別も明確に指摘できること，しかし，④ you say は文脈や状況の支えがあるので，実際には隠れた tautology として文の表面には現れず，多くの場合，話者にもその間の事情が意識されることはないこと，つまりクリシェ一化しているということ，更には，⑤前件ｐも後件ｑも共に聞き手に帰属すると解釈しなければ，この発話が持つ聞き手に対する痛烈な皮肉の意味合いをその発生のメカニズムから説明し得ないこと，を一つずつ検証した。

論者は直説法反事実条件文の 'If p, q'に関して，上記の諸点を理論的に解明したと自負するが，この条件文の持つ謎の全てを解明できたと言うつもりは勿論ない。論者の思い違いや思考不足は分析のいくつかの局面であることと思われる。しかし，現時点においては，論者の論考がこの問題に取り組む者の新たな出発点となり得ることだけは確信している。

（注）

（１） 論理用語の実質含意の真理表

p	q	p ⊃ q
T	T	T
T	F	F
F	T	T
F	F	T

Akatsuka（1986）の指摘するように直説法反事実条件文（indicative counterfactual conditionals）はこの真理表の第４行目に照合される。そして，例えば，次の文のように，前件ｐと後件ｑの間に全く関係が見出されない自然言語の文としてはおかしなものも，形式論理学の推論の仕方を表現した文としては正しいとされるのである。

If Paris is the capitol of France, then two is an even number.（真理表の第１行目に照合）

If Nixon was innocent, then geraniums grow on the moon.（真理表の第４行目に照合）

（２） 直説法反事実条件文の意味解釈において，後件ｑの偽の認識から，前件ｐの偽の認識に至り，条件文全体としては前件ｐの偽を強く主張する，とする説は Quirk et al.,（1985）にも見られる。

そこでは，次のａ が ｂのようにパラフレイズされている。

a. If they're Irish, I'm the Pope.

b. Since I'm obviously not the Pope, they're certainly not Irish.

（ Quirk et al., 1985: 1094）

そして Quirk et al.,（1985）は直説法反事実条件文を Rhetorical conditional clauses という見出しの下で一括して扱っているが，何がどう rhetorical なのかについての本質的な説明は与えられていない。その本質的な解明は本論考の【６】【７】【８】で与えられることになる。

（３） Quirk et al.,（1985）の用語 （ Quirk et al., 1985: 1112）

（４） Tautology が新しい意味解釈を聞き手に促す原因は，Grice（1975） が唱えた Cooperative Principle の観点から説明できる。Cooperative Principle とは，対話者が対話をするときには次の４つの maxim（Quantity, Quality, Relation, Manner）をお互いに守っているという想定のことである。具体的には，対話者は⑴必要な情報を含む話をし，⑵真実のみを伝え，⑶関連のあることを語り，⑷明確に順序良く語る，というものである。Tautology の生み出す意味は，「同語反復をしているが，話者は Cooperative Principle を遵守して，必要な情報を含む話をしているはずだ」と聞き手が考え，話者の意図を探ることから生まれるのである。

（５） *OED* には，a temperature の「物質や体の温度」の意味での文献の初出は1670年，have a temperature の「高熱を出す」の意味の文献の初出は1898年と出ている。a temperature の「高熱」の意味が文献に登場するまでに約200年かかっていることが分かる。

（*The Oxford English Dictionary* Vol. XI p. 163）

References

1．Akatsuka, N. (1986). 'Conditionals are discourse-bound.' In Traugott, E.C., ter Meulen, A., Reilly, J. S. & Ferguson, C.A.(eds) *On Conditionals.* Cambridge: CUP. 333—351

2．Grice, H. P. (1975). 'Logic and Conversation.' In P. Cole and J. Morgan (eds) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts.* New York: Academic Press, 41—58.

3．Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.

4. Noh, E-J. (1996) 'A relevance—theoretic account of metarepresentative uses in conditionals. In *UCL Working Papers in Linguistics 8,* 123—163.
5. Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. & Svartvik, J. (eds) (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
6. Smith, N. V. (1983). 'On interpreting conditionals.' In *Australian Journal of Linguistics 3,* 1—23
7. Sperber, D. & Wilson, D. (1981). 'Irony and the use-mention distinction.' In P. Cole (ed.) *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press, 295—318.
8. Sperber, D. & Wilson, D. (1992). 'On verbal irony.' In *Lingua 87,* 1/2: 53—76.
9. Sperber, D. & Wilson, D. (1995) *Relevance: Communication and cognition* (2nd edition). Blackwell, Oxford.